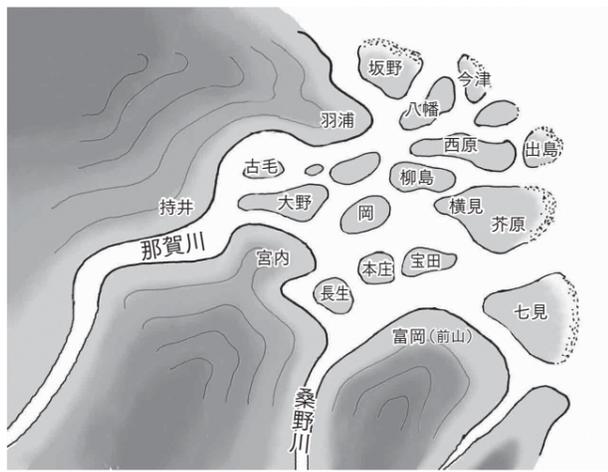


# わがまち阿南の源流を訪ねて



▲自然氾濫時代の那賀川  
平安時代中期に編さんされた『和名抄(わみょうしょう)』には、那賀郡は八郷と記録されていることから、一郷50戸平均として400戸程度あったと推定されます。当時は、記録に残されるような家には1戸あたり家族や使用人など20～50人程度が住んでいたため、人口は1万人を超えていたと思われます。



▲流水文銅鐃



▲辰砂採掘遺跡の道具



長国と栗国

**那賀川の乱流で島が点在**  
古代四大文明が大河の近くで発展したように、私たちのまちや暮らしもまた川とともにありました。  
阿南市には、那賀川、桑野川、福井川などが流れ、紀伊水道に注いでいます。中でも、「阿波の八郎」の愛称で知られる那賀川は、室町時代(500年ほど前)の大洪水による大変化が起こるまでは流路が定まらず、大野、古毛、八幡、今津、岡、長生、本庄、宝田、柳島・横見・芥原、七見地区は島であったと考えられています。下流域に中洲が形成されるまでは、那賀川の河口は持井周辺で、旧河道では、富岡町の前山(現在の眉山)は波打ち際であり、長生町まで潮が寄せていたといわれています。

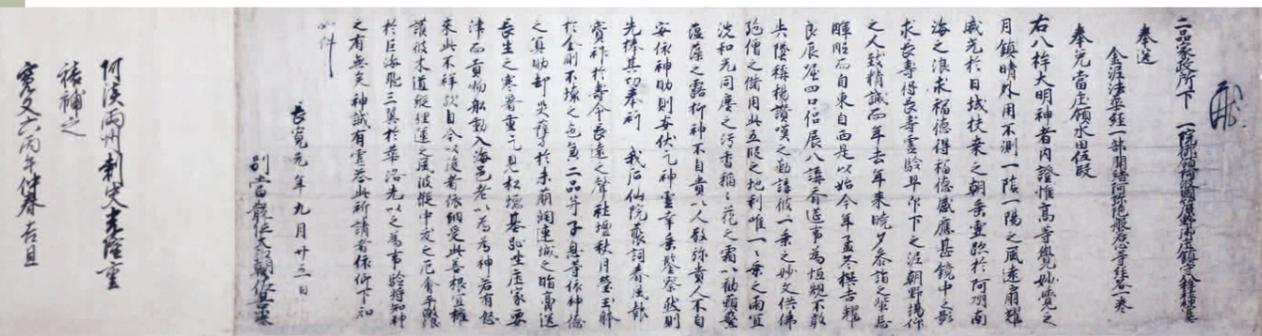
那賀川下流域には「南島」「柳島」「中島」「出島」「色ヶ島」など「島」のついた地名がたくさんあります。また、「見能林」「西路見」「七見」「横見」など、「見」のつく地名は水を意味し、那賀川が乱流していた名残です。中世の人々は、そうした小高い所に集落をつくり、周りの湿地帯に稲を植えて暮らし始めました。

## 長国から那賀郡へ

桑野町から出土した一万年以上前の旧石器時代の遺物や深瀬町で発見された約4500年前の縄文時代後期の深瀬遺跡は、太古の人々の暮らしを今にとどめています。  
また、水井町には、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、赤色顔料「水銀朱」の原

料となる辰砂が採掘されていた若杉山遺跡があり、そこで精錬された水銀朱は、他国にも運ばれていたと考えられています。  
那賀川流域が日本の歴史に登場するのは、現存する最古の歴史書『日本書紀』の中であり、450年頃この地が「長」の名で呼ばれ、大和朝廷と交流があったことが記載されています。「長」の国を流れる川が「長川」で、これが現在の那賀川の語源です。  
那賀川流域から出土した銅鐃や点在する古墳は、かつての「長国」の豪族たちの存在の証です。

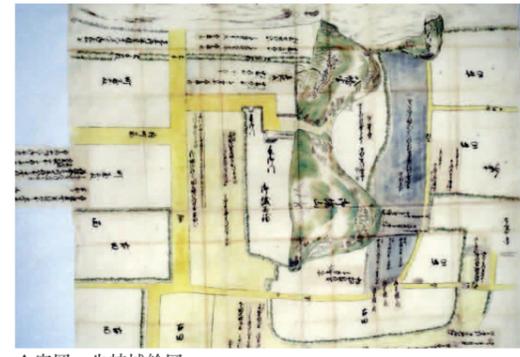
長国の北には吉野川の流れる「粟国」があり、大化の改新(645年)後にこの二つの国は「阿波国」に統一され、長国は「那賀郡」として中央



▲紙本墨書二品家政所下文  
長生町宮内の八幡神社は、「延喜式」神名帳記載の那賀郡七座(式内社)の一つで、長の国の国造の祖神が祀られており、徳島県内最古の現存文書である国指定重要文化財「紙本墨書二品家政所下文附紺紙金泥法華経八巻」が、国指定重要文化財「木造大己貴命立像」等とともに所蔵・管理されています。



▲森家館絵図



▲富岡・牛岐城絵図

集権の律令国家に組み込まれていきました。  
古代の那賀郡は、園瀬川、勝浦川、那賀川、海部川流域にわたる広大な領域でしたが、その後、各流域が分離され、那賀郡が那賀川流域に固定されたのは平安時代末期のことでした。

## 阿波公方ゆかりの地

室町時代後期は、阿波(特に阿南市域)がこの国に最も影響を与えた時代でもありました。  
天文3(1534)年、室町幕府10代将軍足利義植の養子義冬は、阿波国守護細川持隆に迎えられ、足利家とゆかりの深い天龍寺領であった平島荘(現在の那賀川町)に居を構え、平島の地には良質の港



▲西光寺境内にある阿波公方墓所(那賀川町)

## 城下町 牛岐から富岡へ

室町時代後期以降、天正10(1582)年に土佐の長宗我部元親に謀殺されて落城するまで、牛岐(富岡)の地は、阿波国守護細川氏の家臣、新開実綱が治めていました。蜂

があり、上洛の機会をうかがうには絶好の場所でした。  
この義冬が初代「阿波公方」です。義冬の子義栄は、永禄11(1568)年に室町幕府14代将軍となりました。  
その後、文化2(1805)年、9代阿波公方義根が阿波国を退去するまでの間、阿波公方の居館「平島館」には、高名な文人が入りすするなど、阿波南方における漢文学の中心地の観を呈し、文化・学術面にも大きな影響を与えました。  
公方が平島の地を去って210余年。平島館は残っていませんが、西光寺境内には、室町幕府10代将軍足利義植、14代義栄をはじめ、歴代阿波公方の墓石が残り、幾多の伝承を伝え、ありし日の面影をしのばせています。

## 阿波の海上守護 森水軍

現在の椿泊町には、かつて森甚五兵衛を当主とする阿波水軍の拠点がありました。南方土佐の海上の押さえとして居城(松鶴城)を築き、参勤交代の折には船団を組んで大阪へ往復するなど、徳島藩の海上方御用を勤めました。兵法・水軍に通じ、代々甚五兵衛を襲名して、阿波蜂須賀藩の水軍に関してはすべて森一族に任されるほどで、その地位は明治維新まで変わることはありませんでした。